

2022. 4. 3. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書9章2～8節
『主イエスと共に生きる』

本日与えられました聖書の箇所は、いわゆる「山上の変容」と呼ばれるくぐりです。

2節でイエスは「ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた」とマルコは書き始めます。先週学びました8;31以下でもマルコはペトロが復活信仰共同体以前、つまり初代教会の前身ともいべき共同体—イエスの十字架と復活を拒否—の代表として描き出したように、ここでもペトロのみならずヤコブとヨハネも登場させることにより、より一層当時の初代教会が内包していた問題を浮き彫りにしようと致します。

この三人の登場は5;37の「ヤイロの娘」や14;33の「ゲッセマネの祈り」にも見られます。この表現はもちろん弟子たちの無理解の強調もあるのですが、実際の所はペトロの信仰告白と同じく、彼らの精神を培って来たユダヤ教の権威の象徴なのでしょう。

マルコはそれらを律法学者やファリサイ派の人々といった外部にだけ敵対するものとして見出すのではなく、初代教会内部の問題として告発してゆくのです。外の誰かに問う場合は、まず自らの内側が問われなければならないということなのです。

さて、一行は「高い山」に上ったといえます。古来よりこれはタボル山だとかヘルモン山だとかいわれますが、問題はその山上で起こります。

モーセとエリヤの登場です。モーセとは律法のことであり、エリヤとは預言を表します。共に先程使った言葉で言うところの「ユダヤ教の権威の象徴」なのです。律法と預言、これがイエスの時代においても全ての判断基準であり、ユダヤ教の主軸(権威)でした。

5節以下で、ペトロは大慌てで「仮小屋」を建てることを提案します。

おそらく仮小屋とは祭壇といった見える物ではなく、「偉人イエス」という過去への閉じ込めだったのでしょう。モーセ(律法)もエリヤ(預言)も閉じ込めて権威化してしまったように、崇める権威としてイエスを閉じ込めることが福音の完

成という考え方があったということなのです。

権威とは何なのでしょう。わたしたちは現実的に一種の権力として理解してしまいがちです。緊張や恐怖、そして重圧が強要される力です。このように権威を力としてしか受け取れなくなってしまうというのは、わたしたちの現実の人間関係が既に復元力を失ってしまっていることを物語っているのではないのでしょうか。

初代教会の時代も同じような環境に置かれていました。モーセもエリヤもそのような恐ろしい権力として理解し、そしてイエスさえも祭り上げることに閉じ込めてしまい、その権力のもとに完成を見ようとしたのです。

しかし、イエスの語る福音がもたらす権威とはそれらとは全く逆行するものでした。それは優しさであり、暖かさや意欲を起こさせるものでした。人はそれに触れる時、安心と感謝を抱いたのです。そしてすべての行き詰まったかに思えた関係にやわらかな復元力を与えたのです。

7～8節で雲の中から声がしたといます。「これはわたしの愛する子。これに聞け」と。そしてマルコは、「弟子たちはあたりを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた」と記します。

わたしたちは「臨在」という言葉を使います。それは「共に生きる」ということなのです。そのイエスの側からの迫りに促されて生きたいと願います。